

子どもたちが安心して暮らせる社会を目指して

NPO法人ゴールドリボン・ネットワーク 理事長 松井秀文氏に聞く

日本における子どもの病死原因の一位が小児がんであることを知っている人はどれだけいるだろう。また、脳腫瘍、骨肉腫など四十七種類にも渡る小児がんの治療薬が、数年前までたった二種類であったこともほとんど知られていない。

この知られていない病の治療研究開発に助成し、多くの人に現状を伝える活動を展開するNPO法人ゴールドリボン・ネットワーク。代表の松井秀文氏はアフラックの社長を退いた後、二〇〇八年に、同法人を立ち上げた。松井氏に活動にかける思いを伺った。

多くの人に小児がんの現状を知って欲しい

「ゴールドリボン・ネットワークのホームページには「年間およそ

二千五百人の子どもが新たに小児がんに罹患し、全国で一万六千人近い子どもたちが小児がんと闘っている」との記載があります。

松井 年間の罹患患者数は二千五百人と紹介していますが、二千人と云う人もいれば三千人と言う人もいます。小児がんは基本データの少ない、ある意味、知られていない病気といえます。二次がんや心機能障害、免疫不全、慢性肝炎、四肢切断といった合併症で苦しむ子どももたくさんいます。

「小児がんは、今では七割近くが治る反面、その約半数が合併症で苦しんでいるとか。

松井 薬の副作用や、放射線の影響もあるでしょう。しかしそれ以外

外の要因もあります。合併症がどのように起きているのか、経過を分析するにもそのデータがありません。最近、大人のがんでは、病後の経過をたどるための登録システムもできましたが、子どもの場合は小児がん学会の方々が任意でデータを蓄積するしかありません。そもそも、小児がんの種類は中分類で四十七と多いのに罹患者が少ないので、治療データが集まりづらい。だから小児がんの研究には時間がかかります。研究は何年も続けないと成果は見えてきません。しかし、お金が続かない。できるだけ多くのご支援をしたいのですが、まだまだ足りていません。

「薬の種類も少ないのですよね。」

松井 二〇〇六年頃までは、たっ

た二種類だったんです。その後、厚労省が規制を緩めて、現在は十種類の薬（血液のがんを除く）が認可されています。しかしまだまだ、新薬の開発も必要です。

「そんなに少なかったのですか！がんは注目度の高い病気で、研究も新薬開発も進んでいると思っていましてから驚きです。」

松井 大人のがんはそうかもしれませんがね。がん対策は地方自治体でも進めていますし、乳がん、胃がんなどに対する支援も大きな広がりを見せています。しかし、小児がん対策の予算は減っているんです。大人の方に回ってしまった。そういう意味でも小児がんはまだまだ知られていない、日の当たらない病気の一つなのです。



松井 秀文（まつい・ひでふみ）氏 プロフィール

NPO法人ゴールドリボン・ネットワーク 理事長

- 1944年 生まれ
- 1968年 東京大学経済学部 卒業
- 1968年 川崎製鉄株式会社 入社
- 1974年 アメリカンファミリー生命保険会社 入社
- 1995年 社長就任
- 2003年 会長就任（2007年相談役就任）
- 2008年 NPO法人ゴールドリボン・ネットワーク設立 理事長就任

「がんと闘い、合併症とも闘う子どもたち。必死に生きている姿を思うと胸が詰まります。」

松井 このNPOを始めたときは、このような治療研究開発への助成

をしたかと思っていました。しかし、現在はそれだけでなく小児がん患者・経験者のQOL（Quality of Life）向上のための研究開発への助成や、多くの方々に小児がんを知っていただく活動をしています。まだまだやりたいことがたくさん

ありますが、資金を集めることも大変です。資金はNPOの抱える一番大きな課題ですね。

松井 今は、幸いにもアフラックが

応援してくれず、社員も代理店の皆さんも支援してください。これは非常にありがたいことです。

「アフラック以外にも、売上げの一部が寄付される「ゴールドリボン支援自動販売機」の設置を通して、応援する企業の輪も広がっていますね。」

松井 二〇〇九年四月に第一号が長野に設置されましたが、その後、全国に広がって、ダイドードリンコ様、コカ・コーラボトリングの各社様、キリンビバレッジ様、アサヒカルピスビバレッジ様などにもご参加いただき、現在百四十台になりました。もちろん企業としてご理解をいただいたのですが、社員の個人が会社に働きかけてくださったこともありました。このようなファンドは草の根的に多くの方のご協力をいただくことが大切だと思います。

「まさに同感です。コツコツと裾野を広げることが大事だと思います。」



ゴールドリボン自動販売機

「大企業の経営者でいらした松井さんが、NPOを始められたことは、NPO全体の信頼度を上げ、また参加する層を厚くすることにもつながるように感じます。」

松井 新入社員研修をこのNPOでさせていただきます、というお申し出もありました。NPOのこと、小児がんのことを知っていただくことは大事ですから、ありがたいです。

「小児がんの現状を知れば多くの方が共感しますよね。その他にはどのような活動をされているのですか？」

松井 今年四月に開催したチャリティウォークには三千人が参加しました。ウォーキング協会の方は、四回目で三千人だから、すぐに四千人になると言われています。はじめはアフラック関係者だけでしたが、今では彼らは目立たなくな

りました。しかしお金がかかって、大変なのも事実です。

「イベントはきついですがよね。でもやらないと広がらない。」

松井 そうです。やはり知っていただいて広がっていかないとけません。今年は、京都で第四十八回日本癌治療学会学術集會が行われま



チャリティウォークには 3000 人が参加

すが、そこで初めて小児がんの市民公開講座をサポートすることになりました。でも見積書が来てびっくり！しかしこれも知ってもらった活動です。やり遂げなければなりません。

「志と現実。私もいつも悩んでいます。イベントに参加する人たちは、小児がんのことを知るだけでなく、親子のきずな、感謝する気持ち、思いやりといったことの大切さを見直すきっかけになるのでしょうか。」

小児がんとの出会いがアフラックへの転職の扉を開けた

「小児がんと出会ったのはアフラックよりも前と聞きましたが。」

松井 アフラックに関わるきっかけ、と言いますか、創業メンバーに加わる決断をしたきっかけが小児がんだったのです。アフラックへの

松井 多くの方に参加いただける仕組みを作ることが大事です。バナナにゴールドリボンマークのシールを貼って、売上げの一部を寄付いただく取り組みもしています。また現在、製紙会社さんではトイレレットペーパーの売上げでも同じような仕組みを検討してくださっています。一件あたりの金額は一円、二円ですが、多くの方に知っていただき、広がっていくことが大事です。一方で、支援を受ける私たちNPO側も、「ここは支援しても大丈夫」という判断をいただけるようにすることも必要です。ですから経営データなども全てオープンにしています。

転職に迷っているときに、小児がんでお子さんを亡くされたお父さんの手記に出会いました。白血病と闘うお嬢さんの姿、病院と家との二重生活、経済的負担などについて切実な思いが記されていました。

―その手記を読まれて、すぐに「財団法人がんの子供を守る会」の事務局を訪問された。

松井 はい。そこで他の方の手記も読んで、がんと闘うことは経済的な面との闘いでもあり、がん保険の必要性を心底、感じました。その思い

がアフラック日本社の創業者・大竹美喜さんからの誘いを決断できなかった私の背中を押ししたのです。

―大竹さんとはそれまでお知り合いでいらしたのですか？

松井 当時、私は損害保険会社に勤めていましたが、彼はその代理店だったので。直接は知らなかったのですが、人を介して役所と折衝ができた人材を、ということでお誘いをいただきました。二十九歳のときです。

―しかし、がん保険を扱うアフラックからの誘いと手記との出会いが重なるなんて、運命的なものを感じますね。

松井 アフラックの副社長から社長になる時期に、代理店と共に社会貢献活動

をしていこう、という話が持ち上がりました。継続的に行える社会貢献ということで、代理店さんと一緒に、がん遺児への奨学金（公益信託アフラックがん遺児奨学金）を始めました。これは返還の必要がない奨学金です。その五年後には、「アフラックペアレンツハウス」※を作りました。そして、今でも社員や代理店の皆さんが、この取り組みを続けてくださっていることを誇りに思います。

―がんと闘う人を応援したいと思った志を、事業でも社会貢献でも実現された。筋の通った生き方をなさってきたんですね。

お客様に喜んでいただける仕事に出会えた幸せ

―松井さんは東大経済学部を卒業されて、はじめは川崎製鉄に就職されたのですよね。エリートコースを走んでこられたのに（笑）。

松井 当時、私は倉敷の水島にいました。製鉄所を作っている真っ只中

で、おもしろい時期でした。しかし、コンピューターの前で仕事をしている自分に、これが俺の仕事かと問いかけていました。一年に一度自己申告ができる制度があり、自分が何をしたいのか、別紙付きで人事に出したのですが反応はありませんでした。従業員は三万人近くいます。仕方ないですよ。でも、やっぱり違うよな・・・と。それで辞めたのです。

―次にしたいことがあったのですか？

松井 いえ、ありませんでした。とりあえず、損保会社に決めました。それも、独身寮の先輩と酒を飲みながら、保険会社は楽でいいぞ、と聞いたからなんです。正直、次のことを考える時間を作るために就職した、ということですよ。

―とりあえず、なんですよ。その損保会社さんには申し訳ない感じですね（笑）。

松井 そうですね。しかし、一年半

(※)「アフラックペアレンツハウス」：小児がんなどの難病治療のために、遠隔地から大都市圏の病院に入院する子どもの家族の経済的（宿泊施設の提供）、精神的（ソーシャルワーカーの常駐）な負担の軽減を目的とした総合支援センター。



分で塾を作りま
した。家庭教師よ
り効率がよいと思
い仲間と始めまし
た。

―バソナの南部さ
んのようですね。

松井 私は卒業す
るときに、これを
事業にすることを
考えませんでしたし

で新商品も作りましたから許して
もらえるかな。恐らく日本で初め
ての自動車保険の月払い制度です。
しかし、この「とりあえず損保に」
がなかったら、大竹さんにも出会わ
なかった訳ですから人生はわから
ないですね。

―松井さんは、もともと起業創業に
関心があったのですか？

松井 経営をしたかったことはあ
りますね。大学に入ってすぐに自

ん。経営がおかしくなるのは、大体
において、細かいことがその先でつ
ながっていないからなのです。

―川鉄に感謝ですね。でも辞めると
き、お母様は悲しまれたのでは？

松井 泣きましたね（笑）。ただ、
母は、私は束縛されるとだめな人
間だということを知っていましたか
ら、自由にさせてくれました。五人
兄弟の下から二番目ですから。

―今は喜んでいらっしゃることで
しょうね。

松井 はい。私自身、アフラックの
仕事に携われて本当に感謝していま
す。アフラックの社員はお客様から
直接感謝される機会が、他の業種の
方よりも多いと思います。保険のお
陰で経済的な心配をしなくても病氣
と闘えた、そんな手紙をいただきま
す。がん保険を始めた当初、がんを
扱っているが故に、お客様から「俺

を殺したいのか」とか「縁起でもな
い」と言われたこともありましたが、
後に感謝されたりもしました。やり
がいのある仕事です。がん、命に関
わるこの仕事に就けて本当にありが
たかったと思っています。

―自分の仕事と会社に誇りを持てる
ことは大切です。アフラックの社員
の皆さんはお客様に感謝をされて幸
せですね。

医者が医療に専念できる 環境を作ることが大事

松井 実は今、地域の中核病院の経
営にも関わっています。それですご
く忙しくて。

―そんな仕事までされているのです
か！最近では、病院の経営難や小児科
が減少していると聞きますが。

松井 その病院にも小児科がありま
すが採算が合わず赤字です。でも支

えないといけない。子どもが少ない、子どもの命が大事といいながら、一方で採算が合わない仕組みがある、矛盾していますよね。

―病院の先生がそのような状況の中で経営の舵を取るのには難しいでしょうね。

松井 基本的に医師は医療に専念するべきだと思います。医師は医師の言うことしかかかない、という声もありますが、病院には経営をマネージメントする専門家が必要だと思います。そのような人材を育成して病院経営に当れば、医療費の伸びも抑制出来るように思います。病院には、非効率なところが多くあるように思います。これも仕方ないのかも知れません。医師の方々は経営のトレーニングを受けていないのですから。

―大学も病院も、経営の専門家が経営者になっていない、という課題を抱えていますね。

松井 医師にも経営を両立させている立派な方はおられます。しかし、

それは一部にすぎません。それでなくとも、医師は疲弊しています。そもそも、医療者がへとへとになって働かないと回っていかないとということもおかしい。人の命を守る病院です。現在の報酬体系も問題でしょう。

―「小児がん」のことを考えると、日本の課題が浮き彫りになりますね。

松井 医療のあり方については色々と言われますが、まずは医師が医療に専念できる環境をつくり、そしてそこで彼らがスキルを上げて社会に役立つには何が一番大事かを考えないといけない。

―松井さん、やるべきことがいっぱいありますね。

子どもの可能性を救いたい

―そんな松井さんですから、他にもいろいろなることを依頼されているのでは？

松井 養護施設の後援会長もやっています。施設の子どもたちは高校を卒業すると施設を出ないといけません。なかなか大学に行けません。この子たちに希望を持ってもらいたくて、勉強がしたいのなら、後援会が学費を全部だしてあげることにしたのです。そうしたら一名が大学に、二名が専門学校に進学しまして、今年、そのうちの一名が幼稚園の先生になりました。「子どもの可能性を救ってあげたい」これが私の大事なテーマです。がんの子どもも、養護施設の子どもも、あきらめないで生きてほしい。

―子どもは親も健康も選べない、それで人生全てダメ、ということはあまりにもかわいそうです。

松井 そうです。私たちの活動はアフラックの代理店さんにも支援をいただいています。その中から、今、自発的に地域支援に取り組む方々ができています。高齢者の活動への支援であったり内容は様々ですが、ボランティアに参加する方が増えています。

―子どもの可能性、地域の可能性を引き出すために、松井さんのような経営のプロの活躍がこれから益々必要とされるように思います。最後に夢をひと言お願いします。

松井 難しいですね。私は夢を追いかけないから（笑）。私の使命は子どもたちが元気で安心して暮らせる環境を作ることです。それが少しでも果たせるよう活動することが私の役割だと思っています。

―社会のお医者さんですね。

松井 私がこうした活動ができるのもアフラックで過ごせたおかげです。そしてそのアフラックが成長できたのは日本のおかげ。日本に恩返しをしたい。私の活動は恩返しです。

―ボランティアという言葉を日本語に訳すと、「恩返し」なのかもしれません。ありがとうございます。

インタビュ―

公益社団法人日本フィランソロピー協会

理事長 高橋陽子